〈書評〉

上柿崇英 著

『<自己完結社会>の成立 —環境哲学と現代人間学のための思想的試み—』上・下巻

鈴木　敏正*
Toshimasa SUZUKI

これから論議を呼びそうな，ユニークで重厚な作品である。

ユニークなのは，<自己完結社会>だけではない。それは「われわれが高度化した社会システムへの依存を深めることによって，結果的に目の前の他者，物理的に接触する生身の人間に対して，直接的な関わりをもつ必然性を感じられなくなっていく」事態だとされている。本書の独自性は，哲学＝「現代人間学」的視点から「必要となる基礎概念をひとつひとつ自ら整備し，理論的枠組みそのものを独自の形で構築しつつ，その意味と背景を探っていこうとしている」ところにある（「はじめに」）。その丁寧な作業が，上下巻にわたる本書に重厚さを与えている。

序論では「現代人間学」の４つの原則，①<思想>の創造，②絶対的普遍主義の否定，③世界観＝人間観の提示，④強度を備えた<思想>の希求，が示される。④では，哲学の「真の役割」は世界観＝人間観を提示し，時代の不確実性や不透明性に耐えうる潜在力と，人を動かしうるだけの言葉の潜在力をもった思想にすることだと主張している。

＊北海道大学名誉教授　Professor Emeritus, University of Hokkaido

第一部では，<自己完結社会>の内実は，社会的構造物・社会制度の複合である<社会的装置>とそれに依存して生きる「ユーザー」という関係にあり，そこでは<生の自己完結化><生の脱身体化><関係性の病理><生の混乱>が生まれることが指摘される。それは<自立した個人>の解放というイデオロギー，その実，「際限のない自由と平等」が行き着いた先であり，人間存在の“生きる”ことの意味が問われていると言う。A.ギデンズの再帰的近代化論と対比してみたくなるが，社会学ならぬ「現代人間学」を志向する著者は，①環境哲学，②<生>の分析，③<関係性>の分析の３つのアプローチを採る。第二，三，四部の課題である。

第二部では，「人為的生態系」としての<社会>（社会的構造物，社会的制度，意味体系＝世界像）を，人類史的観点から捉え直している。その“変異点”は①農耕の成立（<人間>と<自然>の間接化），②国民国家・市場経済・化石燃料で特徴づけられる近代（<社会>と<自然>の切断），そして③歯止めを失った人為的生態系＝社会が「人間それ自体との“整合性”までをも失いつつある」状態（<社会>と<人間>の切断）に至っている現在＝<自己完結社会>で，「生物存在としての人間」のあり方が問われている。

そこで，第三部「人間的<生>の分析と<社会的装置>」である。まず，「<生>の三契機」すなわち①<生存>，②<現実存在>（他者とともに生きる人間），③<継承>が提示される。しかし，<自己完結社会>においては，これらは<社会的装置>への“委託“という形で達成されることになり，<生>のあり方は「ユーザーとしての生」になる。意味体系＝世界像が縮小し，「社会的装置」が突出する（<生活世界>からの自立）。「システムによる生活世界の植民地化」論（J.ハーバマス）や「生政治的統治」論（M.フーコー／W.ブラウン）との異同が問われようが，その結果，<根源的葛藤>の適切な緩和や，時空間的な<存在のつらなり>に自らを根付かせることができなくなり，さまざまな<病理>が生まれるとするところに本書の主張がある。

第四部ではまず，「他者存在」とは本質的に「意のままにならない存在」であること，自己存在＝<この私>は，<我—汝>の構造（<関係性の場>）から

立ち現れてくることが確認される。人間相互の関係には，＜間柄＞（社会に共有された特定の“関係性の型”）とそれを互いに解除してもかまわない度合い＝＜距離＞という“仕組み”があり，それらには＜関係性＞に伴う負担を軽減し，円滑なものにする働きがある。しかし＜自己完結社会＞では，「底無しの配慮」か「この私」同士の「存在を賭けた潰し合い」かに至る「０か１かの＜関係性＞」に陥っている（「ゼロ属性の倫理」）。背景には「人間はあらゆる抑圧や権力関係から無制限に解放されなければならない」という＜自立した個人＞の思想があり，「意のままになる他者」を求めるが，その結果，「意味のある関係性」や「意味のある私」も存在しなくなる，と言う。

「負荷なき自己」論批判（コミュニタリアニズム）や「承認をめぐる闘争」（ヘーゲル）を想起させるが，著者は続いて「共同行為」としての＜共同＞の概念を探求する。そこでは，共同の「負担」を考えない，旧来の「牧歌主義的—弁証法的共同論」が批判され，共同のための「事実の共有」「意味の共有」「技能の共有」という３条件，さらに＜役割＞＜信頼＞＜許し＞といった“仕組み”，「＜共同＞のための作法や知恵」が必要であることが主張される。＜自己完結社会＞ではしかし，「社会的装置」のもつ「強固な自己調整能力」によって「非人格的な形での連帯をすでに達成」し，「互いに対する介入を拒む代わりに，自身の人生にかかわる責任はすべて自らが負うべきだとする倫理」＝「不介入の倫理」が支配的になり，＜共同＞の条件もそれを担う能力も喪失している。

以上の分析を経て，本書の結論である第五部がある。その最初の章で，明治維新以来の日本社会の動向を５つの段階に区分し，＜自己完結社会＞に至る日本の動向を具体的に整理している。読者にはこの第九章を先に読んでおくと，著者がどのような歴史的状況把握をして，どのような思想＝理論創造をしようとしているのかがよくわかる。第５期＝現段階（2010年～）は「進展している現代科学技術によって，まさしく＜自己完結社会＞が台頭していく時代」だと位置付けられており，これまでの分析結果が集約されている。

その上で，＜世界観—人間観＞の視点からの「最終考察」がなされている。

結論は端的に，「＜有限の生＞とともに生きる」ということである。従来の「自立した個人」の思想を支えた「自由の人間学」が，「政治的自由」を超えて「存在論的自由」にまで拡張されて，＜無限の生＞を求め「現実を否定する理想」＝「無間地獄」となってしまったことへの批判が込められている。＜有限の生＞の原則は，①生物存在，②生受の条件，③意のままにならない他者，④人間の＜悪＞とわざわい，⑤不確実な未来，の諸原則である。それらをふまえ，意のままにならない他者・世界とともに生きることの＜世界了解＞を前提に，＜有限の生＞とともに生きる“術”が提起されている。それは，(1) 哀苦と残酷さに満ちたこの世界で生きることの＜救い＞，(2) よりよき＜生＞を「美しく生きる」ための＜美＞，である。人間の＜生＞に対する著者のやさしさと，＜思想＞の強さが現れている。

以下，今後の議論のために若干のコメントをしておく。

本書は，啓蒙主義（悟性主義）批判を徹底しようとしたものと言える。著者は，旧来の（A）理性，自由，平等，権利，連帯，正義，権力，抑圧，資本主義，全体主義といった概念を使用せず，（B）環境，生，関係性，生存，継承，間柄，共同，役割，信頼，許し，悪，救い，美といった「独自の基礎概念」を整備して「自己完結社会」を説明しようとする（上p.ix，下p.157）。しかし，（B）の諸概念の多くは，著者が批判して止まない「絶対的普遍主義」の代表者・G.W.F.ヘーゲルが『精神現象学』で，「悟性」を乗り越える自己意識・理性・精神として提起していたものである。＜悪＞と＜救い（赦し）＞や＜美（芸術）＞は「精神」章，前提となる「意のままにならぬ他者」との「相互承認」は「自己意識」章，個体性と環境世界，「意のままにならぬ」近代社会としての「事そのもの」は「理性」章。後の『法の哲学』で「欲求の体系」（「ユーザーの体系」？）としての市民社会を論じたことも周知であろう。これら啓蒙主義（悟性主義）批判の現代的再検討が不可欠であろう。たとえば，相互承認論から社会的自由論へと「人倫」（＜間柄＞？）分析を展開したA.ホネット。

（A）の諸概念には矛盾・緊張関係があることもふまえておくべきであろう。たとえば，（A）にない「民主主義」は（＜自己完結社会＞をもたらしたという）

「自由と平等」に対立関係があるから生まれる運動である。それは近現代的人格の基本矛盾，すなわち「公民と市民の分裂」とくに市民における「社会的個人と私的個人の矛盾」の現れであり，それらの分裂・矛盾を克服しようとする社会的協同実践の中に，「人間的＜生＞」に依拠した将来社会の方向を考える必要がある。著者の「＜共同＞の条件」の探求（第８章）は，そこで有意義な実践的民主主義論として位置付けられるであろう。

評者が「自己完結性」と対比してみたいのは，20世紀先進国社会を捉えるA.グラムシの方法＝「自己包括性」である。＜自己完結社会＞論には，人格論を前提にして，経済構造・市民社会・政治的国家の総体を捉えようとしたグラムシ的視点はない。＜社会的装置＞の内的構造，とくにその矛盾的システムの構造と展開メカニズムにふれるところもない。国家の役割も含めて，社会的装置の「強固な自己調整能力」（およびその限界）は，その矛盾的展開をふまえてはじめて理解できるであろう。

現代の「市民」は消費者・生活者・労働者・社会参加者・社会形成者といった諸側面をもつが，「ユーザー」は福祉国家・消費社会化以後の「消費者」（あるいは「受益者」）であろう。それゆえ著者は，「ユーザー」批判の視点として，生活者の「生命と生活の再生産」の論理を求めることになった。その先に，＜社会的装置＞を不断に生産・再生産している「労働者」「生産者」の位置付けが必要であろう。「賃労働者とその家族」の再生産の一環として「ユーザー」の存在がある。しかし，「市場経済」と区別される「資本主義」概念を避ける著者にそうした分析をする方向は見られない。

著者は，コジェーブ『ヘーゲル精神現象学読解』における「動物—精神—動物」という弁証法＝「絶対知」理解は「狂騒的な理想主義が現実に対して敗北」したのにすぎないと言う（下p.156）。しかし，後期コジェーブが「歴史の終焉」を見たのは戦後福祉国家のもとでのアメリカ的生活様式（「自己完結社会」？）であり，それを受けてF.フクヤマが冷戦体制終結後の時代を「歴史の終焉」としたことはよく知られている。現実のアメリカ合衆国ではその後，外に向けては覇権主義的な「デモクラシーの帝国」，内部では格差拡大・貧困・社会的排除問題の深刻化を背景とする分断・対立，「自由民主主義そのものの危機」がもたらされた。

日本では2010年以降が「自己完結社会の成立」期とされているが，リーマンショック後の東日本大震災からコロナ危機までのこの時期は，むしろ「自己完結社会の破綻」を示したと言える。そもそも日本には，福祉国家としての社会的条件に欠落がある。それゆえにこそ，政府と財界に共通の将来社会論としての「Society5.0」（デジタル革命によって可能な，「いつでもどこでも誰でもが必要なものを必要なだけ受け取ることができる社会」＝「自己完結社会」のユートピア）が喧伝されてきたということではなかろうか。

著者は＜自己完結社会＞から逃れることの困難を強調し，当面する未来は①否応なく＜ユーザー＞であることから「降り」ざるをえなくなる，②究極の自己完結社会が実現する，の２つしかないと言う（下p.155）。しかし，否定的であれ肯定的であれ，②はイデオロギーでしかない。評者は，①のような状況におかれた人々の人間的再生の運動の中に「第３の未来」をみることができると考えている。たとえば，自己喪失・他者喪失・コミュニティ喪失状態におかれた東日本大震災被災者の「人間的復興」の取り組みでは，被災者・支援者の固定的関係を乗り越えて，相互受容にはじまり，共感，他者・自己信頼，立場交換などを潜ったエンパワーメント過程をみることができる。そこには「赦し」「救い」の局面も，芸術・文化活動の意義も確認できる。

そうした動向は，深刻化する貧困・社会的排除問題に取り組む諸活動の中でも見られる。「第４の未来」を考えようとするならば，グローバル・サウスからの「善き生」や「多元世界」の提起にも注目すべきであろう。それらをふまえた＜思想＞の展開は本書の守備範囲を超えるかも知れないが，＜有限の生＞とともに生きる「共生社会システム」形成には不可欠であろう。

（農林統計出版，2021年，上巻328頁・下巻278頁）